葬の上に小石を置き墓の目印にした。

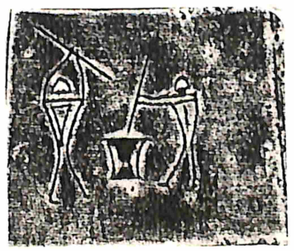
明光庵の墓石で最も古いのは、寛政二年二月七日（一九五年前＝一七九〇）の秋本屋＝家と言う墓石である。又、明誓庵の古い墓石は六五九年前の嘉暦年代（一三二六）の墓石である。明光庵に隣接している嘉瀬霊園は、昭和五四年八月一一日に新しく出来た墓地である。又、南に約五〇米位の所に共同墓地があり「此の土地は以前、嘉瀬村の火葬場として使用、昭和五四年四月一日金木町から共同墓地として、永久無償貸与され、同年六月二五日、青森県知事から、墓地管理の許可を受け造成し組合員四六人、共同管理し完成記念に碑を建立、面積五九七㎡、昭和五六年八月十三日」と碑が建てられてある。

大昔はお寺に色々な行事があって賑った。一月、五月、十月の二三夜二月十五日の涅槃会、三月十七日の春彼岸会、四月八日の灌仏会、旧暦の八月十三日のお盆（盂蘭盆会）、九月二〇日の秋彼岸、旧暦八月十五夜、十月五日～十五日迄の十夜会、正月、と数えると切りが無い程に、仏教上の行事が嘉瀬のお寺でも行なわれたが、戦后から次第に廃れている。

其の昔、神社やお寺は村や集落を支配し、村人はお寺を中心に総てを頼ったものであり、高齢者は、村に行事があると赤飯や団子を作り仏の供養をした。

往時、嘉瀬の中央地帯には道路も無かったが次第に人家が増え始め集落が形成されたが、藩制後期頃から村の中央地帯に、古町から派立～喜良市、又、五所川原から嘉瀬～金木に通じる狭い道路が付き、人々は往来したが、明治十八年に現在の道路が拡幅され、道路が完全に着工整備されたのは、明治四三年に出来上ったと言う。

後町



約七九六年前の文治五年（一一八九）安部貞季の作図に依ると、すでに当時から嘉瀬城が築城されており、又、嘉瀬は築城以前に小集落が形成されておったとの伝承がある。

往時には何処の集落でも、小集落が出来ると、集落の「護り本尊」として、祠を祀る慣習があった。

嘉瀬も推定から見て、安部貞季の作図（七九六年前）に嘉瀬城が記されておる通り、約八〇〇年以前には集落が構成存在しておったものと考察され、此の頃から貧弱ながらも、嘉瀬集落の北側の「後＝ウシロ」の小高い丘陵平坦地に、小さな八幡宮の祠が祀られておったが、年々歳々

此れを「期」に前町と後町では「道路を中心として」北側には神社があり、南側にはお寺があるから「前と後」に分け北側を後町、南側を前町と名付けたと言うが、昔の前町と後町は賑やかな町内だったと言う。

又、後町にはお宮があるから、お正月や宵宮の祭りには参拝人で賑わい、前町にはお寺の行事がある度にお寺参りで賑わい、特にお盆などは古町の佐野家の所から、本町の原田酒店の所迄は、約二百五十米位の距離があるが、娯楽に恵まれなかった昔の老若男女は、盆踊りは随一の楽しみであり、盆踊りは二百米以上も大きな輪となり、夜明け迄下駄を減らし踊って賑わった。

次第に老朽腐敗化し、集落の人々は懇談の末に、元亀二年（約四一四年前＝一五七一）八幡宮を再建したが、再建后、約十六年目を経ずして、天正十五年（約三九八年前＝一五八七）嘉瀬城が、津軽為信軍の攻撃を受け、お城や、祠＝宮、お寺、民家、古文書等が焼き払らわれたが、其れから拾数年后に、嘉瀬の集落も次第に落着き、開田が進み、復興を見て、寛文二年の七五年后（約三二三年前＝一六六二）に八幡宮を再興した。

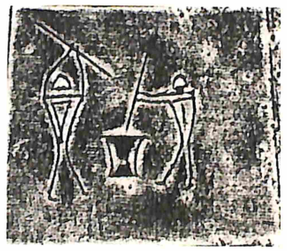
又、元禄十二年（約二八六年前＝一六九九）嘉瀬八幡宮は新田開拓祈願所となったが、貞保四年（二九八年前＝一六八七）の検地帳に、除地として「八幡社地、五間、三間拾五歩とある」社司は佐々木神太夫祐家御供米一石二斗、本社、栩葺、建坪三尺五寸に三尺、四間に三間の神楽殿あり、寛政六年（一九一年前＝一七九四）と文政五年（一六三年前＝一八二二）の棟札が記録されるとあり、除地として、八幡社地一町一畝四歩とあり、祭神は誉田別命、旧村社の祭日は祈年祭四月一〇日、例祭五月五日、新嘗祭拾一月二九日、又、安政二年（一三〇年前＝一八五五）の神社微細社司、由緒調書上帳では四月五日神楽執行、九月五日祈祷執行とある。同書上帳に「建立年月日不祥、寛文二年再建＝三二三年前＝一六六二」とある。

又、明治六年（一一二年前＝一八七三）には村社に昇格されたが、昔の正月や宵宮には、八幡宮に毎年恒例の絵馬、鳥居、石燈籠、神馬や、色々な寄進物が奉納され、笛や太鼓で村を回り賑わった。

往昔、嘉瀬の中央地帯には道路は無かったが、次第に人家が増えるに従がい、藩政後期頃から、村の小高い中央地帯を人々が歩くようになり古町から派立＝喜良市（金木町喜良市）に通じる道路がついたが、明治一八年に道路が拡幅されたのを「期」に道路を中心として、北側には八幡宮神社があり、南側には妙光庵と明誓庵のお寺があるから、「前＝マイ」と「後＝ウシロ」に分けて、北側を「後町＝ウシロマツ」南側を「前町＝マイマツ」と名付けたと言う伝承がある。

又、大正五年（約六九年前＝一九一六）八幡宮神社、拝殿前に安置された、六尺余の堂々とした立派な「大政大臣」の像は、冷コ水町内で奉納され「右大臣」は畑中町内で「左大臣」は派立町内の各町内で寄進安置し、村の安泰を祈り崇拝しておったが昭和五五年八月十八日午后五時十六分頃、八幡宮は子供の花火の不始末から出火し、折からの東の強風に煽られ拝殿、奥の院等、御神体は運び出したものの、村人の必死の消火作業にも拘らず遂に全焼した。

畑中



今から二八七年前の元禄十一年（一六九八）鳴海伝右ェ門、藩命に依り金木新田嘉瀬地区開田、三百町歩、成就なるも打続く冷害や旧十川、小田川、飯詰川、岩木川の決壊で水田は冠水し、相次ぐ大凶作で農民は貧窮の「どん底」に落ちて悩んだが津軽四代藩主、信政は津軽平野の治山治水に全力を傾注し、又、貧困を軽減しようと津軽領内の特産品を考え、其の一策として享保二年（二五九年前＝一七二六）漆木の栽培を命じ奨励した。

享保二年以前の嘉瀬は散在的に小集落が存在しただけで、当時の畑中

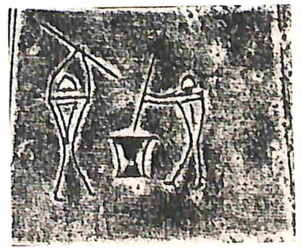
一帯は芒々たる原野であったと言うが藩命に依り「漆木役」を任命された嘉瀬の木下四郎兵衛と鳴海万次郎の両名が、小田川近辺の一部と今の畑中一帯に、漆木を二千数百本植えたと言うが、木下四郎兵衛と鳴海万次郎は漆木栽培管理の為に「漆木の畑の中に住家を建て」村人を使役にしたと言うが藩制時には四郎兵衛と万次郎の両名には苗字も無かったので、嘉瀬の集落の人々は両家を漆木の畑の中に家があったので「畑の中」と呼んでおったと言うが、両家は文久二年（一二三年前＝一八六二）漆仕立役を被下され「苗字と帯刀」を許されたと言う（当時は平民、百姓には名前だけで苗字が無かったが苗字が許されたのは明治四年）

承応二年（三三二年前＝一六五三）の津軽領、道程図帳を見ると今の嘉瀬中央地帯には道路が無かったが、古老の語り伝えに依ると往時には中柏木の分岐道から農協北側の底地を薬師堂（鍛冶町）へ抜け、古町を通り後町の平川久次郎家の北側の裏の底地を歩き「冷コ水」へ抜け、小栗崎から中柏木へと道路があり往昔の人々は往来したと言う。

文化二年（約一七七年前＝一八〇五）嘉瀬＝長富、両溜池堤防が築堤されてから人々は堤防の上を歩く様になり、五所川原〜嘉瀬〜金木間の道程が短縮されたが此の時も今の「畑中」の漆木畑の中を道路が通ったので村人は次第に「畑中」と呼ぶ様になったが漆木は慶応年代の当初から廃れて行ったと言う。

五所川原〜嘉瀬〜金木に至る往時の狭かった道路も明治十八年に拡幅され、完全に着工整備されたのは明治四三年に出来上がったと言うが、往時の畑中は漆木の畑であり漆木役の住家が二軒より無かったと言うが嘉瀬〜長富、両溜池が出来て堤防を道路にし、又、漆木の畑の中を道路にしたので人々は「畑中」と呼ぶ様になったと言うが、遂い近年迄、漆木が畑中の所々に生えてあったと言うが、今もその抜根の跡がある。

冷コ水



今から三三〇年前の明暦年代（一六五五）の頃の冷コ水＝集落には人家が少なく、付近一帯は雑木林や葦などに囲まれた湿地の平坦地帯でした。

喜良市から流れる小田川の水が真直ぐに、冷コ水から車町〜鍛冶町の大堰へと流れていたが、往時の冷コ水＝付近一帯は春の雪解水や雨が降ると、一面の水浸しに悩まされ冷コ水の部落は一時離散し荒廃した儘に数年間、人家も無く芒々なる萱原と化し、人々の気配が無かった。或る時、荒廃した平坦地に突然、怪しい炎が然え周辺の集落の人々は不思議に思い、気味悪く恐怖心を懐き近寄らなかったが、荒廃した平坦地から物凄い地鳴りが起り一夜の内に霊水が噴出した。

大昔は井戸も無く川辺の水を汲んで飲料水にしていたが清水に恵まれない付近一帯の人々は噴出した霊水を求めて、又、平坦地に集落し始めた。

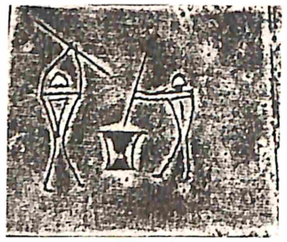
その噴き出る霊水の底に金色に燦然と光る小さな一体の観音像が沈んであったので集落の人々は早速、観音像を引き上げ、お寺に納め安置したと言う。

噴き出る霊水の冷水を往時の人々は田畑の病害虫が発生の時は霊水の冷水を田畑に散布すると病害虫が死滅し、又、疫病や難病には薬水として用い、日照りや飢餓の時には霊水を汲んで露命を凌いだと言うが霊水が噴出した冷水の泉は次第に枯れて何時の間にか自然と姿を消し跡形も無くなったと言う。

数百年後の今は言い伝えも無く忘れ去っているが往昔には冷水が渾々と噴き、付近一帯の集落の疫病の薬水であり、又、田畑の害虫を駆除した貴重な霊水だった。

往昔の冷コ水＝集落付近一帯の人々は霊水の噴く平坦地に冷水を汲むに行くのに「冷コ水（ヒヤフコミズ）」を汲むに行くと言うので、昔から自然と冷コ水と言う往時からの呼び名が、その儘の町内名で呼んでおる。

派立



津軽藩では土地を新しく拓く如に其の集落を何々派立と名付けたが其の地域に依って、それぞれの草分けがあった。

例えば（昔は苗字が無かったので）文吉が古町を拓くと文吉派立、長助が冷コ水を拓くと長助派立、茂助が小栗崎を拓くと茂助派立と名付けたが、同族を中心とした生活範囲の土地基盤として土地を開拓拡大したが、やがて、これらの小派立が、一つの村（集落）に構成し、又、形成発達したが、津軽藩では、各集落ごとに例えば嘉瀬派立、稲垣派立、木良市派立、中里派立と、各集落ごとに派を（派立の意）設けたと言うが、今から約三一一年前（寛文一年＝一六六一）金木地区嘉瀬、新田開発事業が実に拾数年と言う長い年月で継続され、延宝年間（約三二七年前＝一六七七）には嘉瀬の水田、約一七一町歩、開田成就なるも打続く冷害や木良市から流れる小田川の水が、冷コ水から車町〜鍛冶町の大堰へと流れていたが折角、植付けた稲は、ひと雨降る如に大洪水となり水田は冠水し、又、日照りには大早抜となり農民は凶作不作のたびごとに甚大な被害を受け泣くにも泣けず離農する農民、食うに糧なく草根木皮を以って辛らくも露命を凌く有様で飢饉の際には草根木皮すら尽きて飢死者が出始めたが、それを見兼ねた時の金木代官、船水五左ェ門、福士勘十郎は大洪水の原因は小田川から今の冷コ水＝車町＝鍛冶町へと流れる蛇行的な大堰の流水と究明を付きとめ、これには日夜、頭を痛め何んとか小田川を岩木川近く迄、川巾（幅）を広く直線の小田川にと、四代藩主、信政に直言、藩では藩直営工事として本格的に川幅と直線の河川掘削開発堤防工事計画を始めたが、今の津鉄の鉄橋付近から、旧十川下流迄の総延長は三、七五〇米、堤防の上幅拾七米、堤防高さ二米、下幅九米の測量計画案が出来上り、見分役に工藤七良右ェ門、斉藤吉衛等が仰付けられたが、当時の嘉瀬の家数六三軒（延宝年間＝三二七年前）借家三軒、人数三九六人、馬二八頭、田一七一町五反九歩、畑三九町二反九畝二八歩（津軽知行之帳）の小集落だっただけに、小田川の難工事を遂行するには一日に数拾人、数百人と言う人夫が必要だった。金木組代官所では（金木組代官所は貞享四年（一六八七）に、二四ケ村支配）、当然、地域集落派の人数だけでは人手不足で津軽藩全域、又、羽後（秋田）、羽前（山形）、陸中（岩手）、越後（新潟）などからも大勢の人寄を募り、小田川工事に取組んだが困難な事業だけに心血を注いだが、ひと雨降る如に小田川の増水や岩木川からの逆水などで、折角築いた堤防が決壊と言う悪条件で、其の度に河川の

流れが変り水田が川底になったり押流されたりした。血と汗の滲む様な苦労の甲斐も無く幾度と失敗が繰り返された。

金木代官、船水五左エ門、福士勘十郎、見分役、工藤七良右エ門等は日夜、頭を痛め散在しておる隣接の各集落の派（派立の意）ごとに作業分担を設け、又、他国から募った人達を今の嘉瀬派立に作業小屋を建て寝泊りさせたが他国の人々は、何れの集落の派（派立の意）にも属しないで分派を作り、工事分担の責任を立派に遂行する意志を固め、団結して工事に取り組んだ。分担作業は、各集落の派ごとに（派立の意）組織して以来、河川の工事は以外と進み、三、七五〇米の小田川の開発工事は延宝年間からの構想も数年（約六年）と言う長い年月で元禄中期の拾一年には河川（小田川）に通水し、遂に完成した。

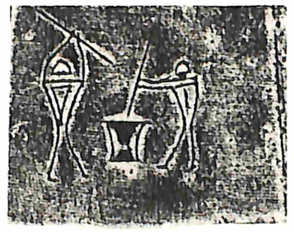
地域農民の喜びは例え様も無かったが、それでも二年や三年には、一回や二～三回は岩木川の増水や降雨時には氾濫、堤防が決壊し、水田は大洪水と化したが、其の后も幾度と無く、再改修し現在に至っておるが隣接集落派の（派立の意）人々や他国人が小田川掘削開発堤防工事に率先協力し、立派に工事が完成して、解散の機運になったが人間模様が千差萬別であり故里に帰散する人、又、残留した人々は河川補強工事や水田に「しがみつき」嘉瀬に永住したが、余命幾許も無く露と消えた人々も多々あったが遺体は無縁仏として、嘉瀬派立の俗に言う「工藤の墓」に（霊園、派立＝現＝昭和町）丁重に葬むったとの言い伝えがある。

何れにせよ往昔からの嘉瀬の開田は水害や冷害で不毛の地とも言うべき湿地帯を此処迄開発するには、用水、排水、灌漑などの水利事業の効果が絶大な物であるが、現在の嘉瀬の部落を形づくった祖先の英知は偉大な物であり、吾々が今、ここに生存しておる事は祖先の艱難辛苦の賜ものであり改ためて「古きを尋ねて新しきを知る」必要があると思う。

津軽藩では新しく拓えた土地の集落（村）ごとに派立と名付けておったが明治二一年（一八八八）に町内制が公布され、嘉瀬も行政上、集落内は町内名を実施たれたが派立では藩政時の嘉瀬派立の名残りを町内名に派立と名付けたと言う。

小　栗　崎

小栗崎近辺の田圃は往古の昔、十三潟に連らなる宏大な潟で有り、突出している平坦地の崎は、往時には何故か野生の小粒の栗の実が豊富に稔っておったと言う。



古書に依ると小栗崎の村の年代成立は古く約三六一年前の寛永（一六二四）以前とも考えられると有るが事実は不祥だ。

今から一三〇年前の安政二年（一八五五）の神社、由緒調書帳に依ると小栗崎の産土神、稲荷宮は「建立年代、不祥なる」が寛永十年＝約三五二年前（一六三三）再建と有り、又、二九六年前の貞享四年（一六八九）検地帳に依ると、田四一町二反七畝一五歩、畑七町一反七畝、田畑屋敷合せて、四八町四反四畝一五歩とあり、石高は三四八、八五六石で内、田の上、中田は四九、四％とあり、除地として稲荷社地、惣太夫の屋敷三畝一〇歩、稲荷社地一畝六歩、其の外、薬師堂地、観音堂地、明神社地もあるが明神宮に堂は無く其の土地は一ツ森と呼ばれていたと言う。古書から推すと小栗崎の年代成立は古く、約四〇〇年以前と考えられるが往時の小栗崎は散在的に人家があり突出しておる平担地の崎には栗の木が林立繁茂しており、秋には小粒の栗の実が平担地の崎に鈴なりに稔り、小栗崎の先住民は秋には栗の実を穫り保存し冬期の補食として生活の糧にしたと言う。

往時の小栗崎の先住民は突出しておる平担地の崎は恵みの崎であると喜び、小さい栗のある崎と言うたが唯れ言うとも無く自然に小栗崎と呼ぶ様になったと言うが、栗の害虫である「栗玉蜂」が往時に発生し栗の木の葉に栗玉蜂が「虫瘤」の巣を作って養分を奪い、栗の木が自然に枯れて全滅したと言う説がある。

宝　さ　が　し

いつの世にも一獲千金を夢見る人達がいるものだが、今は鬼籍に入って十年前後になるが、中柏木部落にも同好の士が三人いた。

同好というよりも苦しまぎれの発想からの同好である。

誰しも労せずして千金を得たい心境は変りないだろうが、この三人は「斗酒辞せず」の型で朝からでも酒を飲むのに遠慮する人達ではない。暇さえあれば飲む。いな酒を飲む暇をつくるのだ。従っていつも貧乏神がつきまとう。飲むほどに、酔うほどに、詩吟とも民謡ともつかない変てこな歌をナガメル。

ある時いつものとおり三人が酒宴？を催しているなかで一人が、「なァけやぐ、昔八兵衛屋敷の跡に宝物、埋めでらず話だけれどもひとつ宝物掘り当てで見るが」というわけで、金はなし、酒は飲みたしの酔った勢いで早速宝さがしの段取りに入った。

三人の見方からの宝物は金、銀、つまり大判、小判、銭貨のことで、もしも宝物を掘り当てれば資産も増やせるし、好きな酒をいつでもたらふく飲めるのだ。いろいろなロマンと夢を描きながら、お盆も過ぎ朝晩涼しくなった九月の始め宝さがしの仕事にとりかかった。

「かたりべ」の第一集に掲載された八兵衛屋敷にまつわる伝説の「アヤメ」（白百合とも云われる）のあとを捜すことで、考古学とか遺跡発掘とはほど遠い欲深な宝さがしである。

しかし伝説のアヤメのあとは探すべくもなく容易なことではない。それでも誰言うともなく伝えられて来た場所を見定め発掘の作業に入った。だが掘れども、探せども土器のかけらは出てくるが、目ざす宝物は姿、形も現わしてはくれない。二日がかりの頑張りで出土したのは少し形の変った石だけである。

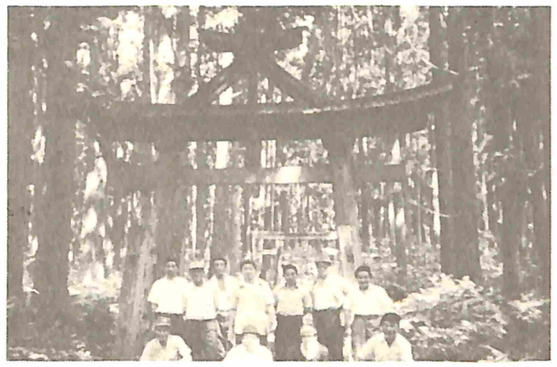
それでも彼等三人はくじけない。金銀獲得の夢は破れても酒を愛する人生は終りないからである。二日の労苦の結晶である「石」を七面大明神に献納し、今は忘れかけている次代の人々に拝まれている愛すべき人達であった。

（原　田）

東日流安東一族の遺跡を尋ねて

津軽半島縦断踏査記（1）

木　村　治　利



▲市浦村山王坊日吉神社

▲市浦村福島城址外堀跡

古代津軽王国は、実在したのであろうか。

今、津軽半島は歴史学界や考古学界から注目され、伝説、遺蹟跡、発掘等の調査が盛んに行われ、これに係わる新刊書も多く見られるようになった。

東日流外三郡誌（市浦村史）によると「津軽半島の十三湖周辺は、今から二千七百年前すでに強大な独立国として津軽古代王国が実在していた」と記録されている。

もしもこのことが真実であるなら、今までの日本歴史は根底からくつがえることになるだろう。

我が会も、幻の古代王国の壮大なロマンに魅せられ八月十八日、三度目の嘉瀬ー小泊間津軽半島縦断実地踏査のため、炎暑の中、国道三三九号線を一路北上した。

参加者は、秋元惣之進、秋元清逸、木立久二、沢田薫、須崎正敏、外崎三千男、山中正津、原田万治、木村治利の九名である。

東日流外三郡誌によると「みちのく北の果て津軽半島の十三湖周辺には、紀元前七、八百年頃、先住民の阿曽部族と支那から漂着した津保化族とが混合し平和な生活を送っていた。当時の日本は、部族間の侵領殺伐たる戦国の世であったのに、ただこの津軽のみはこうした殺伐の侵領もなく人々は国造りに営みをなし、山里海にその群居をなして豊かな暮しをしていたのである。さらに大和に君臨していた耶馬台国王の安日彦、長髄彦が神武天皇の日向一族に敗北し、津軽に亡命後、阿曽部、津保化族と共に荒吐王国を築き、新しい王位を受けたので一層強大な独立国となった。

とくに安東一族が津軽を支配するようになった鎌倉時代（一二〇〇年～一三〇〇年）の十三湊は人口十数万人以上、神社仏閣二七〇建ち並び数百軒の遊女廊閣が軒をなして賑わい、日本各地からたえず二百隻以上の商船が往来し、東北一の港町であったという。

その十三湊が、興国二年（一三四一年）突然襲った大津波によって、一夜にして地獄絵図と化した。

高さ十六米の大津波と余波十七回によって失なわれた人命は十三万人埋没した家屋三千二百戸、牛馬五千頭、流失米六万俵、沈没船二七〇隻埋没田六百町歩、埋沈した黄金三十万貫、神社仏閣二七〇棟におよび古都の面影は瞬時にして波間に没した。

流失した木片等は、遠く北海道まで続いたと記録されている。

○ 古代耶馬台の探索

私たちは、この踏査よりさきの六月十六日、古代王国に関係の深い耶馬台城跡地探索のため、多々良沢周辺の踏査を実施した。

東日流外三郡誌の中に「東日流の梵珠山の北方に飛鳥山ありて、その林中に石垣えんえんたる耶馬台城あり。千古の歴史をしのぶ太古に安日彦、長髄彦が日向軍に備えた城の石垣なり、この飛鳥山の四方には東に外ケ浜（平内ー三厩むつ湾）、北に大蔵山（大倉岳）、南に魔神岳を位置する。飯詰より五里にて至れり」とある。

この耶馬台城は中国の陽茂台に由来する称名だといわれるが、五角形の城の外に空濠をめぐらし、人力もおよばぬ長大な石垣を山中に築いているのは、この東日流及び紀州（三重県熊野山中にある古代の石垣。長さ一〇〇キロメートル）のみにして他類なき城跡である。

即ち神武軍来征の伝えが残る三重県熊野山中の石垣城跡と同様の長大な石垣の耶馬台は津軽地方の飛鳥山中にもあった。（津軽王国の謎）

東日流外三郡誌の記録は、津軽の史実は津軽為信のため抹殺され、後世に偽り伝えられるのを恐れ、安東氏の後胤である秋田孝季、和田長三郎なる人物が津軽や全国をたずね歩き、苦難八年寛政五年（一七九四）にまとめあげたものである。

その中に古代の事が書かれているが、三郡誌は古代文書ではない。古代の津軽地方では、古代伝承を語り伝える語部によって記録を残してきたのであろう。

二千七百年前、十三湖周辺一帯には、古代阿曽部族と古代津保化族による日本最古の津軽古代王国が実在したというのは幻か、それとも真実なのであろうか。

先づ、大和地方の長髄彦らは本当に十三湖に逃亡して来たのだろうか。

十三湖岸の市浦村の小高い丘に神明宮が国道沿いにある。大和の大王長髄彦の墓とされる於頼洞遺跡は、長髄神社と呼ばれている。そして多数の縄文土器や貝塚、石器など附近から発見されている。

私たちの耶馬台城跡地探索も、古代王国実在を裏付けるためのものであった。

うす墨を流したような曇り空、鹿の子沢から十三粁程、多々良沢附近に到着した頃は、霧雨が降っていた。

四〇分程徒歩で登り降りしているうちに、漸やく一本の道路を見つけ下る。山には詳しい山男ばかりだが、沢は深く、まして始めての山中はあなどりがたい。ワラビ、フキ等の山菜は沢山あるが、今日だけは目も

やらず、只管石垣を探し歩いた。杉林の中、雑木林と渡り歩いたが、発見できなかった。

それを嘆くかのようにポタリポタリと大粒の雨が木々の葉ッぱから落ち始めた。やがてその雨だれが急に烈しく落ちてくる。中止のやむなきに至った。全員びしょ濡れである。次回を期し、無念をこらえて、帰途に着いた。

○ 宮越家の達磨大師像

中里町に入ると、すぐ見渡す限りの緑の田圃である。初夏の強い陽ざしにきらめく緑の葉をなびかせて風が車内に吹き込んでくる。

中里町尾別の旧家宮越家で達磨大師を拝観することができた。

原田万治氏の紹介で宮越節子氏が心よく広い屋敷内を案内して下さった。

庭園は二町歩程あり、静川園と名付けられていた。池の橋を渡って盛土した松林の中に、一坪位の達磨堂が建立され、達磨大師像が奉祀されてあった。

この達磨大師像は弘前の長勝寺の禅堂であった蒼竜窟の主尊であった。明治以降に寺から離れ転々として移り、大正初期宮越家に納まったが由緒ある像である。（ふるさと散歩）

○ 達磨のルーツを探る

達磨とは菩提達磨のことで、中国禅宗の初祖（生没不詳）である。南インドの第三王子で、般若多羅に仏法を学び、中国に遊化した。四七〇年前後に海南島一帯の地方におもむき、魏におもむいたのは四七五年頃と思われている。嵩山少林寺にあって、面壁九年（壁に向って九年間座し、悟りをひらいたという故事）したといわれる。

達磨の根本思想は二入四行とされている。理入を実践的に体得するにほかならない。

中国における禅宗の発達にともなって、日本に渡来したのは鎌倉時代中期（一二六〇）のころからである。達磨像は禅宗祖師として多く描かれている。

我々が知り得た達磨といえば、手足がなく赤い衣をつけている起上玩具の一種で、底を重くして倒れても自然に起上るように工夫してある。この起上り玩具の最初は中国の不倒翁が伝来したといわれ、日本に起上り小法師と称して室町時代（一三九三～一五七〇）に流行している。

達磨のデザインに用いられたのは、江戸中期（一八世紀）からしく末期（一九世紀中期）には玩具を代表するようになった。

赤い彩色が子どもの疱瘡よけのまじないとして喜ばれ、また起き上るということから、養蚕、農作の上出来、大漁あるいは商売繁盛などの縁起物として用いられている。

今では選挙事務所にも多く見られる。

達磨大師は、長勝寺に納められていた大正初期、買入れたのが宮越巌両氏であるという。長勝寺が何故由緒ある達磨大師像を売却したのだろうか。

明治新政府は元年（一八六八）諸事御一新、王政復古の建物から神祇官を再興した。そして神仏混交の廃止、社僧の還俗（僧侶が再び俗人となる）。仏像を社前から取除くことを命じた。

神仏は混交し、神社と寺院は併立し、仏教と寺院は幕府の手厚い保護をうけていたので、神社より優越感的立場にあった。

「人仏判然令」により神仏分離は一気に神道が仏教を攻撃したのが、いわゆる廃仏毀釈である。寺院の破壊、仏像・経巻の焼却など極端な動きになった。津軽では余り極端なことはなかったらしいが、それでも廃寺、寺院の統合などが行なわれた。

政府の神仏分離の政策は、神仏混交の廃止のほか、寺院に与えられていた寺禄その他の特権の廃止、寺院がもっていた寺格の廃棄を実施したので、特にこれまで神社の別の地区にあって神社を支配してきた寺院は壇家をもつこともなかったため、従来の格式を維持することが不可能になり、仏像等が公売に出されたものと思われる。

また、宮越家では宮越靖夫氏のご厚意により家宝の、土佐野又兵衛、狩野三楽、天地三次らの襖繪等を鑑賞することもできた。

土佐野又兵衛作の襖繪は八枚あった。桃山時代の後期、九条家より献上された八枚だといわれる。土佐野又兵衛とは又兵衛治、大津繪のことではないのか。江戸時代の初め、寛永年間（一六二四～四四）より滋賀県大津の追分あたりで売りわたされた民族絵画を大津繪といわれた。元禄期（一六八八～一七〇四）の最盛期と考えられ仏画より戯画の方が発生が古いとされる。筆者はほとんど伝えられない中に、土佐野又平治、又平久治の署名があるものがあり、また大津の又平の名が伝承されている。思うに又平と呼称することが、大津繪作家の慣習であったと解される。

狩野山楽は、一五五九～一六三九年桃山時代の画家である。

若い頃秀吉の小姓としてその側近に仕えたが、画才を見いだされ、その推挙で狩野永徳の門に学んだ。

山楽は師の永徳に比べて遺作が多く、印記のあるもので、西本願寺旧蔵の（鷺鳥図屏風、西村家蔵）、桃花雉子図（森脇家蔵）、帝鑑図屏風（西田家蔵）その他がある。

款記のある繪馬としては、海津天神社の繋馬図は見のがせない。と辞書にある。

宮越家蔵の山楽の襖繪は、花鳥の繪で、元は九条家のものであったらしく、春日神社に寄贈されたものを、神社で公売した際入札で手に入れたといわれる。

又、一枚の襖の裏側には天地三次（明治～昭和）の繪もあった。当時は画家としては、生活に恵まれなかった時代である。

そのほか、島津藩からの静物画、香炉など多数の家蔵を拝観することができた。

終戦直後、米国軍（マイケルパーカー中将）も、わざわざ、見学においでになったという。「人仏判然令」による神仏混交廃止の政策は、廃仏毀釈の大波となって、津軽にも荒れていたことをつくづく知らされた。

（以下次号へ）